



# とびうめ 通信

No.2 2008.11

## HEAD NEWS

### 藤波研究室が「毎日介護賞」に入賞!

—「世代間コミュニケーション・プロジェクト」ほか認知症ケアの活動に—

高齢者介護に新しい取り組みで貢献する団体を表彰する「2008年毎日介護賞」(毎日新聞社主催)において、「認知症高齢者の介護支援」をテーマに研究活動を行ってきた藤波 努准教授(知識科学研究科)の研究室が毎日新聞社北陸総局長賞に選ばれました。大学院生が地域と連携し、幅広い研究活動を行っている点が評価されての受賞です。

#### 創作劇による認知症ケアのコミュニティづくり

今回表彰対象となった研究活動の一部「世代間コミュニケーション・プロジェクト」は、本教育プログラムの学生グループ・プロジェクトとして行われています。高齢者の体験的な記憶を子どもたちが創作劇として再編し、上演するという一連のプログラムで、地元・能美市宮竹地区の小学校やグループホーム、地域のお年寄りなどの協力を得て2年前から実施しています。

元々、「経験を通して体で覚える知識＝“身体知”」を専門分野とする藤波研究室では、思い出を語ることによって認知症の症状改善などを図る「回想法」の実践を行っていました。そこへ、能美市と本学の学官連携協定\*にもとづいて「認知症高齢者の増加を防ぐための環境システムの構築」(下線筆者)というテーマが加わりました。認知症介護を地域全体で見守ろうという近年の考え方や、「回想法」をあわせて練り上げられたのが、この「世代間コミュニケーション・プロジェクト」でした。



お年寄りの思い出語りに聞き入る子どもたち。話のなかから、創作劇に取り入れる題材を拾っていく。サポートで各グループに入った学生も話に引き込まれ、思わず身を乗り出す

#### 多くの人を巻き込む秘訣は「楽しさ」

このプロジェクトの代表として初年度からリーダーシップを執る山崎 竜二さん(博士後期課程、藤波研究室)。「参加者が認知症の方と関わることを楽しいと感じれば、次のステップも参加しようという気持ちになるし、関わってくれる人も増える。強制ではなく、自然に巻き込まれていく形で、地域のなかに認知症ケアのコミュニティを創り出すことができないかと考えました」。山崎さんの狙いどおり、プロジェクトは子どもたちの保護者や市役所、社会福祉協議会、博物館、児童館、劇団など多くの人が関わる大掛かりなものになりました。

学内も、今年度は8名程度のコアメンバー、20名のメーリングリストメンバーが藤波

受賞のニュースを聞いて、「このプロジェクトに参加してくれている子どもたちやお年寄りに、まず伝えたいと思いました」と語る山崎さん



研、國藤研、小坂研、梅本研、宮田研、伊藤研、永井研など、さまざまな研究室から集まっています。「グループワークの一番の魅力は相互触発。プロジェクトの枠組みが大きくなれば、それだけ多様な分野の協力が必要になる。それぞれの目線から得られた気づきを、各自が自分の専門分野に照らし返すことで、さらに研究が進む。それがまたメンバーの動機づけになり、グループの力を高めていくのだと思います」(山崎さん)。

改善を重ねつつ発展してきた活動は、3年目を迎えてさらに大きくなろうとしています。今回の受賞を糧に、ますます充実していくに違いありません。

\*学官連携による地域課題の解決を目的に、2006年春締結。



10月16日毎日新聞朝刊